

IV-127 首都圏を中心とした休日の幹線旅客動向に関する研究

東京理科大学大学院 学生会員 ○岡山 信広
 鉄道総合技術研究所 正会員 武藤 雅威
 東京理科大学理工学部 フェロー会員 内山 久雄
 東京都 阪野 敦子

1. はじめに

近年、国土庁を中心に「全国幹線旅客純流動調査」（以下、純流動調査）が平成2年、7年の過去2回実施され、幹線旅客動向の把握への活用が進められている。しかし、この純流動調査は、平日の旅行を調査対象としており、このデータからはプライベートな目的を主とする休日の幹線旅客動向について把握することは難しいである。

そこで本研究では、「休日の幹線旅客動向は平日とは異なる特徴を持つのではないか。」という視点から、独自の休日幹線旅客動向調査を行い、平日とは異なると考えられる休日のトリップの特徴を把握し、平日の純流動調査に相当する休日の調査の必要性を検討することを目的としている。また、本研究においては、休日の幹線旅行の特徴として「リピート」に着目し、その特性を把握することにより分析を進める。

2. アンケート調査

休日における「リピート」とは、「過去3年間に同目的地に複数回旅行する」と設定した。そのアンケート調査内容は、表1に示す。

調査方法はPT調査と同様、訪問留置き調査とし、調査実施期間は平成10年12月5日から同年12月19日とした。調査対象は、東京、神奈川、千葉、埼玉（関東1都3県）に在住の男女通勤者300人である。また、

同時に上述の調査では対象外となっている学生や主婦、60歳以上の男女を対象とした補充調査も行っている。その方法は、現場面接調査で、調査期間は、平成10年11月21・22日とし、本大学関係者40人、本大学訪問者93人のデータを得ている。

本調査と純流動調査との相違点の第1は、訪問留置き調査により、純流動調査では網羅されていない運転免許の有無、自家用車の所有や旅行経験などの個人属性データを充実させることにより、トリップの特性や旅行者の性質などのより詳細な休日旅行の分析が可能となっている。第2に、各交通機関ごとに実施されている既存の調査データを統合・整備された純流動調査と異なり、本調査では全交通機関の利用者を包括的に捉えていることである。よって、数種類のアンケート調査結果を統合することによって生じる、アンケート全体の方針や質問項目のニュアンスの違い、などのバイアスが排除される。

3. 単純集計による休日の交通行動分析

第1段階としてアンケート結果の単純集計を行い、首都圏を発地とする休日トリップを集計・分析した。その結果を図1から図3に示す。

図1はアンケートにおいて旅行目的を集計した結果を示す。左端の総計の項目を見ると、旅行目的としては、帰省、休養・慰安、見物・鑑賞目的が多いことがわかる。さらに、旅行日程では8月の旅行が全体の35%と集中して多い。これは調査実施時期が年末であり、その時期から最近の長期休暇が「お盆休み」であったためと考えられる。

図2は代表交通機関の選択理由を機関別に集計し、その回答確率（＝回答数/全サンプル数）をとったものである。全体を見てみると、「慣れている」は3機関とも3割以上挙げている。これは、休日の旅行において、利用交通機関にある程度の固定層が存在することを意味している。自動車利用者においては、「移動が

表1 アンケート調査内容

項目	質問内容
過去3年間で利用交通手段など旅行内容を最も記憶にあるトリップ	リピートの有無 出発地・目的地 利用交通機関・経路 旅行目的、同行者・数 旅行費用・負担者、 交通機関選択理由、など
個人属性	性別・年齢層・職業 自家用車・運転免許の有無 など

キーワード：幹線旅客純流動調査、休日旅行

連絡先：〒278-8510 千葉県野田市山崎 2641 Tel 0471-24-1501(ext.4058) FAX0471-23-9766

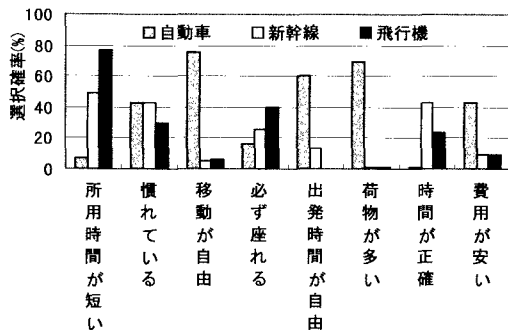


図 2 交通機関別選択理由集計結果

自由」「荷物が多い」「費用が安い」など他の2機関とは異なる結果となっている。新幹線においては、「時間が正確」といった鉄道機関の定時性の実績も反映している。航空機においては、「所要時間が短い」が圧倒的に多く、また、「必ず座れる」という理由が多いことも航空機利用者の特性と見ることも出来る。

また、「リピーター」の特性を把握する方向性を示すため「リピーター」した・しない旅行者数がそれぞれ多い目的地の上位県をとりあげ、その結果を図 3 に示す。休日における「リピーター」を把握するにあたって、帰

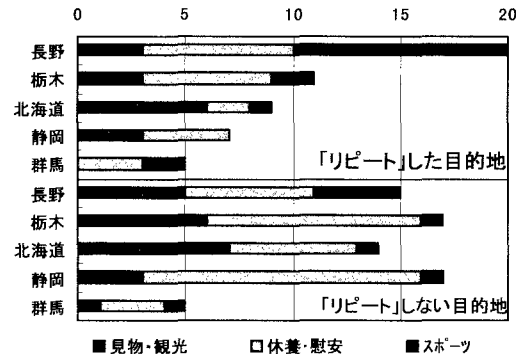


図 3 目的地・旅行目的集計結果

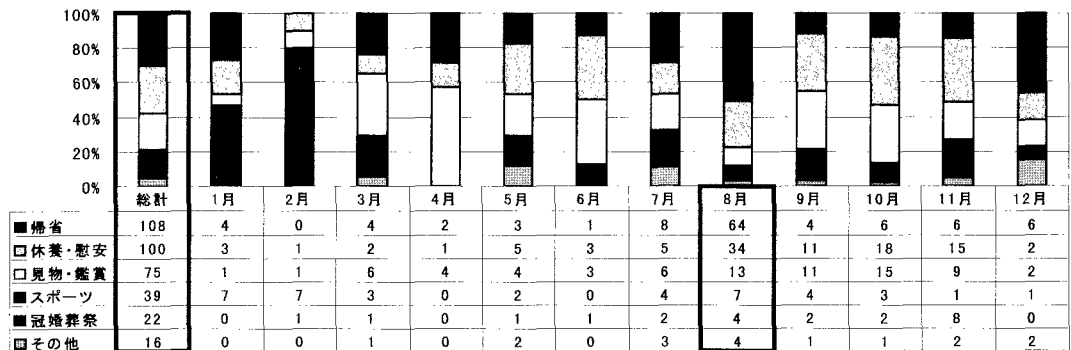


図 1 旅行時期と旅行目的の関係（数値は回答数）

省や冠婚葬祭目的の旅行は、「特定の目的地を有する」など、他の目的と性質が異なるため、見物・鑑賞、休養・慰安、スポーツの3つの旅行目的のみで分析を行う。「リピーター」した目的地としては長野県が1位となっている。長野県へのリピーターの半数はスキーに代表されるスポーツ目的である。これは、長野県はスポーツ施設やスキー場などが充実していることが理由と考えられる。また、「リピーター」しない目的地としては、上位4県は同等の数値となっている。とりわけ静岡県は、温泉地などへの休養・慰安目的の旅行が多く、「リピーター」しない旅行者数が「リピーター」した旅行者数の倍以上となっている。全体的にも見物・鑑賞、休養・慰安目的の旅行が大部分を占めており、スポーツ目的以外の一般的な休日の旅行は「リピーター」しない傾向であると言える。以上のことから、長野県と静岡県を例に、スポーツ目的の旅行は「リピーター」する可能性が高い旅行ということ、また同時に、目的地が休日における「リピーター」に影響を与えると言える。

4. 結論

本研究で行ったアンケート調査は、出発地を関東1都3県に限定し360サンプルと小規模なものであるにもかかわらず、休日の旅行はその旅行目的、目的地、利用機関選択理由、同行者の存在など、きわめて多岐にわたることが明らかとなった。また、利用交通機関に固定層が存在することから、訪問留置き調査による旅行経験を問う調査も有効であると考えられる。

今後の課題は休日における「リピーター」について多変量解析の手法を用いた詳細な分析を行う所存である。

5. おわりに

アンケート表作成に協力してもらった大野哲男君に感謝の意をあらわす。